

社会科における小中連携

小中社会科の系統的な接続と指導のポイント
歴史的な内容—奈良時代の学習を例に—

1 小学校・中学校における授業の特性

文部科学省による調査（平成 26 年小中一貫教育についての実態調査）を始め、全国の小中一貫教育あるいは連携教育の先駆的な実践校の取り組み等の結果から、学習指導面・生活指導面において、校種間の円滑な接続を保障していくことは、児童生徒の学びにとっても有効性があることはいままでもないことであろう。

しかし、連続性・系統性に配慮した授業実践の取り組みと言っても、実際には小学校と中学校にはその特性から様々な差異があり、なかなか円滑な接続ができない実態もある。具体的には、殆どの教科を担当が指導する「学級担任制」である小学校と「教科担任制」である中学校、「一定程度保障された時間の中で問題解決型の学習」を弾力的に行うことができる小学校と「限られた時間の中で計画通りに定められた内容をきっちりと教授する」必要のある中学校、といった差異である。また、児童の発達段階から、小学校では活動型・体験型の学習方法が多く取り入れられているが、高校入試を見据えた中学校では講義型の授業形態が多くなりがちになり、授業のスピードも速い。

社会科学習に限らないことではあるが、小学校教師、中学校教師ともども、互いの基本的な指導スタンスを確認した上で、それぞれの校種における教科学習の実践に当たることが、児童生徒の学びに有効性をもつものであることは十分認識している。しかしながら、同じ学区の小中学校が隣接していたり、近くにあったりしていても、なかなか互いに授業を見る機会をつくることのできない実状もある。そこには、教材研究、児童生徒指導、保護者対応、部活動や分掌業務に追われる小中学校教諭にとって、互いの授業を見に行くゆとりがないこと、授業時間に 5 分の差があり、昼食時間や昼休み、清掃時間等の設定の仕方に違いがあるために、授業を見に行こうと思ってもそれぞれの日課がうまく合わないといった体制上の問題があるのも確かである。

そうした現状を踏まえ、本稿では歴史学習の具体的な単元を取り上げながら、小中学校の「学び方」の違いを明らかにし、その中で小学校教師は、中学校の指導を見据え、小中社会科の系統的な接続を意識しながら指導の際にどのようなことに留意すべきか、配慮すべきかについて考えてみたい。互いに授業参観する前に踏まえておいてほしい事柄である。

2 奈良時代の学習にみる小・中社会科の学習

日本の歴史の 8 世紀中頃、いわゆる奈良時代の学習を取り上げてみよう。小学校学習指導要領では次のように記されている。

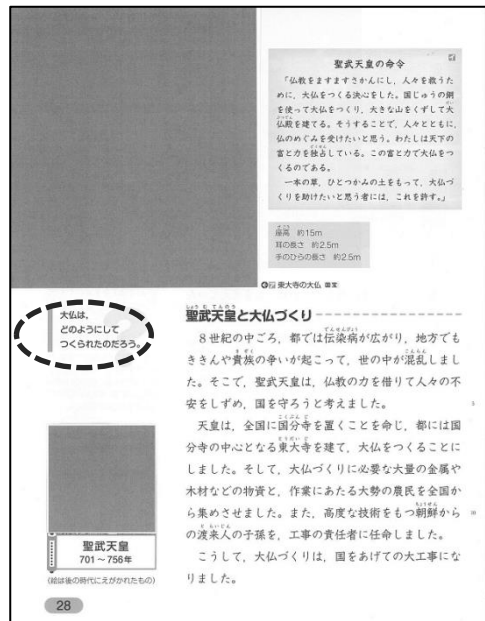
「イ 大陸文化の摂取，大化の改新，大仏造営の様子，貴族の生活について調べ，天皇を中心とした政治が確立されたことや日本風の文化が起こったことが分かること。」（第 3 章 第 3 節 第 6 学年の目標と内容 2- (1)イ，下線は筆者追記）

そして中学校学習指導要領では、「イ 律令国家の確立に至るまでの過程，摂関政治などを通して，大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ，その後，天皇や貴族の政治が展開したことを理解させる。」（第 2 章第 2 節 歴史的分野 2-(2)）

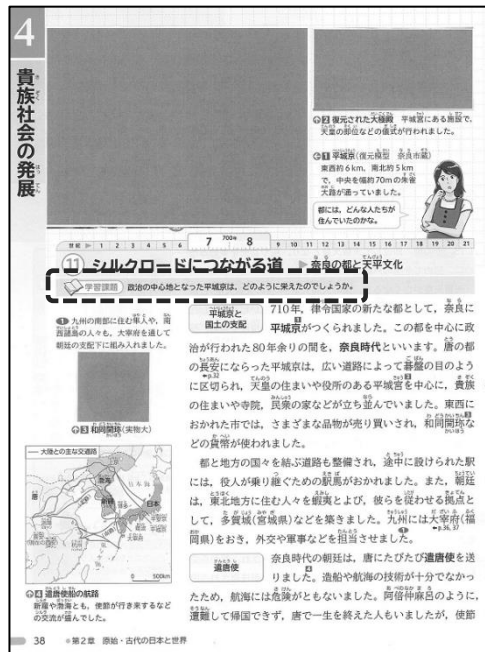
小学校の歴史学習においては、多くの場合、歴史的人物の実績や歴史上の出来事をもと

に学習問題を設定し、その問題を調べることを通して、学習のねらいに迫る問題解決型の学習で単元を構成する。例えば、この時代について教育出版の教科書『小学社会 6 上』（平成 27 年版）で見ると、単元名は「聖武天皇と大仏づくり」、問題設定は「大仏は、どのようにつくられたのだろう」である（【資料 1】囲みの箇所）。この学習を展開するにあたって小学校教師は、例えば新聞紙をつなぎ合わせて、実際の大きさを平面で構成したり、大仏の顔のパーツ（目、眉、鼻、口、耳）を模造紙で作り、体育館に並べてその巨大さを捉えてみたり、あるいは校舎や運動場の高さや広さと比較してみたり、と実感的に大仏の大きさを捉える活動を通して、「聖武天皇は、なぜこのような大きな大仏をつくったのだろう、どのようにしてつくったのだろう」という問題を設定し、調べ学習に向かわせる。問題意識を醸成した上での調べ学習を通して、「聖武天皇は仏教の力を借りて人々の不安をおさえ国を守ろうと考え、大陸からの技術を駆使し大量の農民と物資を全国から集め、国をあげての大仏づくりを行った」ことに気付かせるのである。単元構成を工夫しながら、必要に応じて弾力的に時間数を調整することもある。

では、同じく教育出版の教科書『中学社会 歴史-未来をひらく』（平成 28 年版）では、この時代の扱い方はどのようにになっているだろうか。教科書は、学習内容と年間授業時間数を調整しながら、通常原則として見開き 2 ページを授業 1 単位時間分の内容として編集されている。この奈良時代を扱った見開きページ（p.38-39）の中には、「政治の中心地となった平城京はどのように栄えたのでしょうか。」（【資料 2】囲みの箇所）という問題を最初に設けている。そして平城京の繁栄をもたらした要素として、政治の中心である平城京の様子、藤原仲麻呂や鑑真といった人物を通しての遣唐使の役割、大陸文化に大きく影響を受けた天平文化の特色、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』といった歴史書や和歌集の紹介、といった内容を紹介している。小学校で数時間かけて問題解決的に扱った「聖武天皇」については、「聖武天皇は、唐の皇帝にならい、仏教の力で国家を守ろうと考え、地方には国ごとに国分寺と国分尼寺を建て、都には大仏をまつる東大寺を建てました。」という一文のみである。中学校社会科教師は、授業 50 分の中でこれらの内容について漏らさず扱い、資料を活用して考えさせ、理解させることに努



【資料 1】教育出版『小学社会 6 上』



【資料 2】教育出版『中学社会 歴史』

めるのである。小学校に比べ学習スピードが速くなり、講義型・黒板整理型の授業形態が多くなりがちになる背景がここにある。

3 社会科を実践する上で留意したいこと

(1) 小学校の指導を踏まえて中学校の社会科実践に求めたいこと

小中の接続において中学校の社会科教師に求めたいのは、「子どもたちが小学校で身につけた学び方を中学校社会科の授業で有効に機能させるようにしてほしい」ということである。子どもたちは歴史の事象について丁寧に練り上げて設定した学習問題について、子どもたちなりに調べ、考え、意見を述べる場を小学校で経験してきている。もちろん、与えられた時間数の中で、高校入試も見据えながら、確実に定まった学習内容を授業で扱い理解させねばならない中学校の現実において、同じような構成で授業を行うことはできない。しかし、50分授業の枠の中で、その日の学習テーマにそくして教科書を読み解き板書にまとめる学習法だけでなく、例えば学習問題をもとに、時にはグループ学習や個人の調べ学習を行う場の設定、あるいは学習問題について既習知識をもとに「みんなはどう思うか」とディスカッションをする場の設定を意識してほしい。先程の教科書の例で言うなら、「平城京が栄えたのは、どのような歴史的事実によるものなのか、まとめよう」とノートにまとめていく授業ではなく、「遣唐使によって、平城京はどのように影響を受け、栄えていくことになったのだろうか」といったようなテーマで調べたり、話し合ったりする場を組み込むことを考えてほしい、という願いである。

(2) 小学校教師として歴史学習を指導する際のポイント、留意点

中学校の教師に上記の内容を要望する以上、小学校の教師として歴史学習を実践する上で踏まえておかねばならないことについて整理してみよう。

①それぞれの時代の学習では、可能な限り「問題解決」型の実践に努めること

「学び方」を習得させることである。体験的な学習や調べ学習をもとにしながら、各学級での学習問題（もちろん教科書に示された問題でもよい）を設定し、「問題をとらえる（つかむ）」「問題について調べる」「調べたことを発表する」「調べたことの振り返りや新たに問題になったことについて話し合う（さらに調べる）」「まとめる」といった問題解決学習の実践に努め、歴史学習の「学び方」を身につけさせることに努めたい。

②「資料」や「文章」の出典を明確にすること

資料活用の基礎・基本とも言えることである。小学生は、6年生とはいえ自分の経験談や思い込みによる発言に走りがちにもなる。発表場面や話し合いの場面においては、具体的に資料を読み取り「資料集の○ページの資料○にあるように」「教科書の○ページの○行目を見て下さい」「私が調べた○○という本の○○という資料に書いてあったのですが」「資料○○のことについて計算してみると」というように、発言の中で伝えたいことの根拠となる資料について、しっかり紹介する習慣を子どもたちには求めたい。ノートやレポート

にまとめる際も同様である。

③一つ一つの学習で子どもたちは何を学んだのか、何に気づいたのかを押さえること

小学校6年生の歴史学習での話し合いを見たあとの中学校の社会科教師の感想として、「子どもたちはみんな、学習問題に対して調べたことや考えていることをよく発言して、活気のある授業だった。しかし今日の授業で子どもたちは何を学んだのかがわかりにくかった」といった内容をよく聞く。

例えば、「聖武天皇は、なぜこのような大きな大仏をつくったのだろう」という学習問題について調べたことをもとに話し合いを行ったとする。1単位時間の多くの時間にわたって、子どもたちは天皇の政治への思い、仏教への信頼、伝染病の存在、大陸文化の導入、といったことを様々な資料や根拠をもとに口々に語るだろう。授業において活気がある話し合いが続いた場合、そのまま終了時間を迎え、最後に今日の感想をノートに書いて終わり、という展開になるのではないだろうか。その場合、関心をもち意欲的に「学び」に向かう姿勢は確認できる。しかし授業で学ぶべきこと、知っておいてほしいことを、一人一人の子は確実にとらえられているだろうか。これは、歴史の知識や因果関係について、確実に理解させることが求められる「中学校教師の視点」である。調べ学習や話し合い学習を通して見えてきたこと、わかったこと、新たに気づいたことについて検証し、整理する場も一定必要である。その際、ノートの活用が求められるところではあるが、教科書上の工夫も有効に活用したい。例えば教育出版の教科書『小学社会6上』では、小単元の最後に各ページで取り上げられたキーワードが一か所に再掲され、それらに注目して学んだことや考えたことを整理することを意図した「まとめる」というコーナーが設けられている（【資料3】囲みの箇所）。あるいは時代によっては「深める」ページを効果的に使うことも可能だ。（【資料4】）

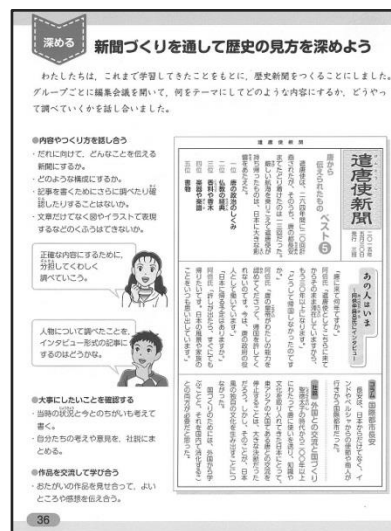


【資料3】教育出版『小学社会6上』

4 最後に

小中学校の連続性や系統性を意識しながら一貫性のある実践に取り組むことの本質は「授業力向上」である。そしてそれに連関する子どもたちの「学びの保証」である。子どもたちは小学校と中学校において同じ日本の歴史を学ぶ場に立つ。小中それぞれの特性の中で、小学校では「学び方」を身につけ、資料を用いて歴史事象をより多面的に考え、発信し、「知」として獲得する姿を重視したい。

以上のことを踏まえながら、難しい状況はあるとはいえ、中学校教師は学区にある小学校6年の歴史学習を、小学校教師は中学校における歴史授業の実践を、1年に1度くらいは見る機会をもちたいものである。



【資料4】教育出版『小学社会6上』